

第四話 夢

私は眠っているが、自分のベッドの上で周囲の様子に気をつけながら横たわっている自分が見えている。ベッドの頭部の板の後ろ側に、足を引きずって歩く音が聞こえる。二つの霊ないしは悪霊どもがそこに立っており、私に向かって、「神は嘘つきで、おまえに約束したものを与えない。」と何度も言い続けている。彼らの冒瀆にほとほとうんざりしているのに、その突き刺すようなおしゃべりを止めさせることが自分にはできないように思われる。突然、階段に足音が聞こえ、明るい光が踏み段を上って来る。その存在が階段を上りきったとき、悪霊どもは慌て出し、逃げてゆく。姿は見えないが深いやすらぎの気持ちを与えてくれる、御使いのような存在に私は気づいている。そして、眼を覚ますと、私の部屋はとても喜ばしい静謐に満ちている。

悪霊どもは、しばしば我々を落胆と不信へと誘惑する。それらの誘惑に対して、神のことばと約束をもって抵抗し耐え抜くと、奴らはすぐに逃げ出さざるを得なくなる。また、我々信者には、この世での歩みにおいて我々を守り、助けるためにあてがわれた御使いたちがいるように見受けられる。

神が我々に恵みを与えるためにお使いになるいかなる経路でも、悪魔は我々をだましたり妨害したりするために使うことができる、ということ覚えなければならない。それは、夢、幻想、啓示、印象、または状況を通して、あるいは説教者や教師によるメッセージを通してでもあり得る。方法の如何を問わず、

敵はそれらを、我々が受け取ったものに付け足したり、差し引いたりすることによってまがい物にしようとする。悪魔によるキリストの大いなる試みのときに、かの敵は神のことばを使ってイエスに罪を犯させようとしたことを覚えよ。

友よ、今日でも、教会の説教壇は悪魔にそそのかされた使者たちで満ち溢れている。牧師たちが、神のことばとご意志を教える代わりに、世の中のあらゆる事柄を宣言することにより多くの時間を費やすとき、彼らはサタンの召使として働いているのだ。私はあえて言おう。アメリカの教会のほとんどの説教壇に、羊の衣を着た狼ども、すなわち真の、混ぜ物のない神のことば以外のあらゆる事柄を説く男女どもが潜入している。多くの場合、彼らの説く言葉（例えば社会的行動など）はそれ自体としては悪ではないのだが、彼らは牧者として、まず何よりも、主と主の王国に仕えるために召されているのであり、自分たちの関心事に仕えるためではなく、会衆の個人的関心事に仕えるためですらない。神の真の牧者は、神のことばを語るなのであって、利得、名声または自分の利益のために、神のことばを薄めたりはしない。そう、サタンには、その片棒を担ぐ家来どもが説教壇とテレビの宣教番組にいる、と言わざるを得ない。我々の霊的な敵は、現実存在する者であり、地上の従者たちの現実の軍団を従えており、従者たちはしばしば、そうと知りつつあるいは知らずに命令通り行動する、ということ覚えておかなければならない。このことに衝撃を受けないようにしましょう。

第二コリント 11章 14節から 15節までを読みたまえ。

「驚くにほどのことではない。というのも、サタンですら光の御使いに変装するのだ。だから、奴に仕える者たちが義に仕える者に変装したとしても大したことではなく、彼らの最期は彼らの働きに応じたものになるのだ。」

神のことばを頻繁に読んで、それを信じる力と、それに従う力が与えられるよう主に求めよう。そうしなければ我々は、これらのずる賢い、ペてんの狼どもによって邪道に導かれ、多くの者が陥ったのと同じ罠に陥るのだ。